

経営学部の入学前教育に関する取り組み事例

篠原 康男・田部 溪哉

要 旨

本稿は、令和3年度入学生を対象とした入学前教育の内容と結果を報告するものである。入学前教育は令和3年2月に実施した。入学前教育の重要な目的は、「大学教育への円滑な移行」と「学習意欲の維持」である。そこで、これらの目的別に入学前教育を2部構成で実施した。第1部では、入学予定者が大学教育へ円滑に移行できるよう、①「何のために行くのか?」、②「何を学ぶのか?」、③「どう過ごすのか?」の3点を軸にして高校と大学の違いを説明した。また、第2部では、大学での学びの特徴について説明するとともに、入学後に受講する講義の模擬体験やゼミナール活動の紹介を行って、入学予定者の学習意欲の維持に努めた。これらの実施後、参加者にアンケート調査を実施した。その結果、参加者の多くが「高校と大学の違い」を理解していた。このことから、今回の入学前教育は「大学教育への円滑な移行」に一定の効果があったものと推察された。一方で、第2部に関する質問や自由記述の回答傾向から、参加者の中には経営学に関する講義やその内容に難しさを感じた者もいることがわかった。今後、城西大学経営学部への入学予定者に対する入学前教育を充実させるためには、経営学の導入的な内容を実施するなど、特に「学習意欲の維持」を図ることが重要であると考えられた。

キーワード：入学前教育、高校と大学の違い、大学教育への円滑な移行、学習意欲の維持

1. はじめに～入学前教育の現状～

平成30年10月、文部科学省高等教育局は「平成33年度大学入学者選抜実施要項の見直しに係る予告の改正について（通知）」を通知した。これによると、平成33年度大学入学者選抜実施要項において、大学入学者選抜に係る新たなルールの一つとして、入学前教育の充実が挙げられている（文部科学省、2018）。当該通知では、早期に合格が決定した後の学習意欲を継続する観点から、平成33年度大学入学者選抜実施要項に対して、①「特に12月以前に入学手続きをとっ

た者に対して積極的に講ずること」, ②「入学予定者に対する高大連携した取組を行うこと(例: 大学入学までの学習計画を立てさせるなど)」の2点を記載する旨が通知されている。なお, この2点は, 翌年度の令和4年度大学入学者選抜実施要項にも同様に記載がなされている。令和2年度国公立大学入学者選抜実施状況(文部科学省, 2021)によると, 学校推薦型選抜などの12月以前に入学手続きを行う入試方法で入学する受験生の割合は全体の48.8%(学校推薦型選抜(旧推薦入試): 38.4%, 総合型選抜(旧アドミッション・オフィス入試): 10.4%)を占めており(図1), その割合は年々増えている。このことから, 今後も入学前教育の充実を図ることが大学側には求められるものといえよう。

入学前教育については, 平成23年度の大学入学者選抜実施要項からその必要性に関する記載があり(文部科学省, 2018), 国公立を問わず, 多くの大学で実施されてきた。近年では, その実施内容に関する報告が多数みられている(森川ほか, 2019; 大塚ほか, 2019; 菅原, 2020; 田上, 2019; 富山, 2019)。大塚ほか(2019)によると, 入学前教育の目的は「大学教育への円滑な移行」であり, 推薦入試などでの早期合格者が合格してから入学するまでの期間でいかに「学習意欲を維持」するかが重要との見解を示している。このことに関して, 田上(2019)は, 追手門学院大学の入学前教育について, 教職員だけでなく在生も学生スタッフとして加えた教職学協働の体制で運営・実践した内容を報告している。同報告では, 入学前教育で「大学と高校の学びの違い」を教員が担当し, 入学予定者間の交流や大学生活プラン作成などのワークショップを学生スタッフが主導したことなど, 当日のスケジュールや準備状況が詳細に記載されている。これらの実施内容やプログラムについては, 満足度や役立ち度, 達成の実感の全項目において9割を超える肯定的な回答が参加者から得られており, 一定の成果があったことも合わせて報告されている。また, 森川ほか(2019)は鳥取大学での15年間にわたる入学前教育の実践について,

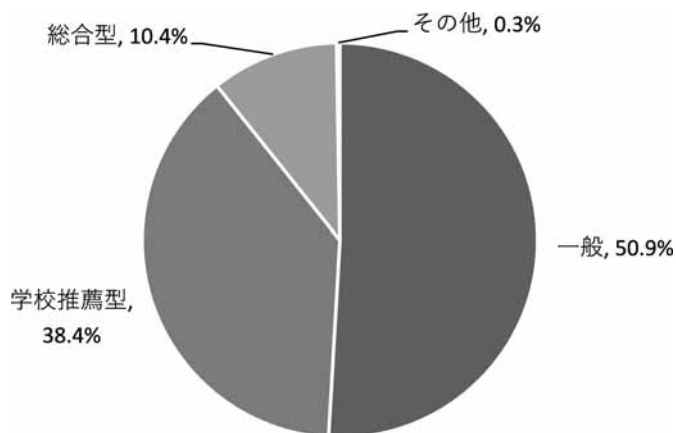


図1 入試形態別の入学割合(令和2年度国公立大学入学者選抜実施状況より)

3つのプログラムに関する報告をしている。それらは、宿泊を伴う合宿研修、学習習慣の継続を目指したeラーニング、入学直後のフォローアップセミナーの3つであり、このうちeラーニングについては、プレースメントテストの結果を用いた難易度調整をすることで学力に応じた学習内容ができていたり、eラーニングの導入前後で退学者が減少していたことを報告しており、学習習慣の継続やその促進に有効であることを述べている。大塚ほか（2019）も、高知大学における入学前教育にeラーニングを導入・実施することで、教員と入学予定者および入学予定者同士の双方向の交流が実現し、他者の存在により学習意欲を維持できたことを報告している。

このように、入学前教育については各大学の実施内容やプログラムには差異がみられるものの、先述した大塚ほか（2019）が目的として挙げていた「大学教育への円滑な移行」と「学習意欲の維持」の2点を柱にしつつ、各大学の特性や状況および入学予定者の学力レベルに応じて実施しているといえよう。これらを踏まえ、筆者らは城西大学経営学部への入学予定者を対象とした入学前教育を、「城西大学経営学部入学前体験講座（以下、入学前体験講座）」として、2021年2月に実施した。本稿は、その実施内容や学生からの反応、今後の課題を整理してまとめたものである。

2. 入学前教育の実施内容について

2.1 入学前体験講座の対象者

入学前体験講座の対象者は、令和3年度の経営学部入学試験を受験し、入学手続きを済ませた入学予定者400名とした。なお、令和3年度の入学者数は500名であり、入学者全体の80.0%を占めていた。これらの入学予定者に対し、入学前体験講座を実施する1か月前に入学前体験講座が実施される旨を電子メールで連絡した。

2.2 当日のスケジュール

入学前体験講座は、令和3年2月16日午前10時30分から13時00分実施された。入学前体験講座の実施に当たり、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言が発出されていたことから、感染症対策の観点から、オンラインミーティングアプリZoomを用いてオンライン上で開講した。入学予定者には、入学前体験講座の実施を連絡する際にオンラインミーティングのリンクも通知し、当日の定刻までに入室して受講するよう指示した。なお、当日システム上のトラブルがあり、オンラインミーティングへの入室可能者数に制限がかかったため、リアルタイムでの参加は300名以下となってしまったが、リアルタイムでの参加者数は終始300人に近く、参加率は70%以上と高い割合であった。また、入室できなかった入学予定者に対しては、当日実施した入学前体験講座を画面収録した動画を視聴できるようにした。

表1 当日のスケジュール

時刻	所要時間	内容	担当者
10:30 10:45	15分	オリエンテーション	司会：担当教員（山口） 挨拶：学部長（杉岡）
10:45 11:45	60分	【第1部】高校と大学の違いとは？	担当教員（篠原）
11:50 12:50	60分	【第2部】大学での学びとゼミナールについて	担当教員（田部）
12:50 13:00	10分	全体のまとめとアンケートの実施	司会：担当教員（山口）

当日の実施スケジュールについては、表1に示す通りである。まず初めに司会の担当教員から今回の入学前教育に関する説明があり、続いて、学部長からの挨拶を実施した。その後、入学前教育のプログラムを2名の担当教員が第1部と第2部にそれぞれ分けて実施した。これらのプログラム終了後、司会の担当教員より入学前体験講座全体を通じたまとめがあり、オンラインミーティングからの退出後にアンケートを回答するよう促した。なお、各部での詳細な実施内容および目的については次節に示す通りである。

2.3 入学前教育の実施内容と目的

2.3.1 第1部

大学は高等教育機関の一つであり、中等教育機関の一つである高校とは学校教育の段階が異なる。そのため、高校までと大学は地続きではなく、高校以前の教育方法や学習者自身の学び方には異なる点が多い。他大学の入学前教育においても、「大学と高校の違い（田上，2019）」や「大学生活を迎えるための心構え（當山，2019）」といったテーマでプログラムに組み入れられている。以上のことを踏まえ、今回の入学前体験講座の第1部では、「大学教育への円滑な移行」を念頭におき、高校と大学の違いについて理解してもらうことを目的とした。また、第1部の到達目標は、(1)大学に行く意味と意義を理解すること、(2)大学での学びについて理解すること、(3)大学生活を有意義にするための注意点を理解することの3つとした。これらの到達目標に準じて、第1部では①「(大学に) 何のために行くのか?」、②「(大学で) 何を学ぶのか?」、③「(大学で) どう過ごすのか?」の3点を軸にして、入学予定者が大学教育へ円滑に移行できるよう、高校と大学の違いを説明した。説明にはMicrosoft PowerPoint for Microsoft 365を用いて作成したスライド（図2参照）を使用し、オンラインミーティング上で参加者と画面を共有しながら、プレゼンテーションを行う要領で行った。

まず①「何のために行くのか?」に関して、大学では高校のように卒業を目指すだけでなく、

高校と大学の違いについて（何を学ぶのか？）

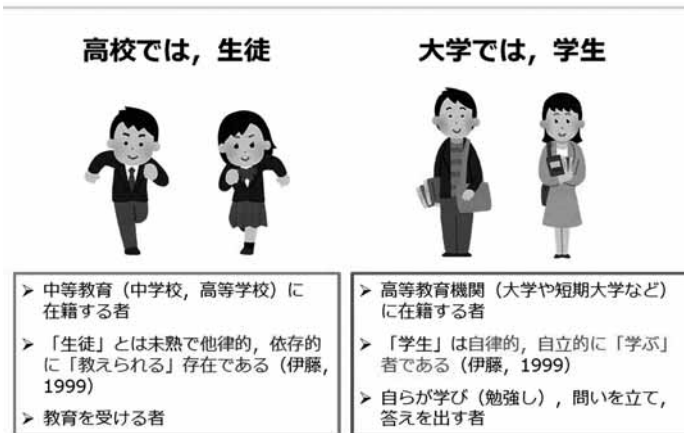


図2 第1部で使用したスライドの例

自身が社会人としてどのように自分の人生を生活したいのか、自分自身の価値観に応じた「生き方」を知ることが目標であることを説明した。続いて②「何を学ぶのか？」に関して、高校では生徒として教育を受け、教えられる者であったのに対し、大学では学生として自らが自立的に学ぶ者であり、自らが問いを立てて答えを出す者であること（伊藤，1999）を説明した。また、後述する第2部のプログラムにつながるように、高校では知識の習得（学習）が主である一方で、大学では知識の活用（学修）が主になることも併せて説明した。特に、高校では学習指導要領などによって教育課程に基準が設けられており、ある問に対する模範的な解が示されるのに対し、大学ではその学問の専門家と学びを深め、これまでに知ったことをもとに、その使い方や活用方法を学びながら答えを見出すことが重要であると説明した。そして、これらの違いが③「どう過ごすのか？」につながっていることを説明し、自分だけの時間割を組むことや時間管理の重要性、クラブやサークル活動の多様性などの具体例にも触れながら、実際の学生生活をイメージできるように、③「どう過ごすのか？」について説明した。これらの説明の後、第1部のまとめとして、「大学生活の目標や取り組んでみたいことを考えてみよう」、「本やYouTubeなど何でもいいので、見た内容を要約してみよう（感じたことではなく、そこから何を知ったのか？）」、「決まった時間に起きて、できれば決まった時間に寝よう」の3点を入学までの期間に実践してみるように呼び掛けた。これらはそれぞれ、①「何のために行くのか？」、②「（大学で）何を学ぶのか？」、③「（大学で）どう過ごすのか？」に対応するものであり、大学での目的意識や自身の興味ある分野や学びへの意識づけ、時間管理や生活リズムの意識づけをねらいとしたものである。なお、第1部で軸とした①～③の3点および受講生に実践を呼びかけた「大学生活の目標や取り組んでみたいことを考えてみよう」については、後述するアンケート調査に設問を設け、入学前体験講座

を経た受講生の理解度および反応を確認した。

2.3.2 第2部

第2部では、「学習意欲の維持」を念頭におき、2つの目的を設定した。一つは、大学での授業内容を理解していくうえで足りないものは何かを、入学予定者に自覚させることである。仮に、入学前に想定していた授業のレベルと実際の授業のレベルに乖離があった場合、それを入学後に自覚したのでは対応が間に合わず、授業についていけなくなる確率が高くなるものと推察される。また、結果として、退学を選択する確率も高まることが予想される。そのような事態を避けるには、現時点での理解力の把握が重要となる。入学する前に大学の授業の一端に触れることで、入学予定者は現時点での理解力で学んでいくことが可能か否かを自覚できる。現時点での理解力では学習が困難であると自覚できれば、入学するまでの期間に自主学習を通じた準備が可能であり、学習意欲の維持に貢献できるものと予想される。

もう一つの目的は、経営学部で開設されている講義やゼミの概要を理解させ、興味を持たせることである。経営学部には、スポーツ推薦入試を受験して合格し、最強化クラブに指定された運動部に入部する学生が多く在籍する。さらに、経営学部が履修モデルコースとして受験生に掲示しているコースの中に「健康スポーツマネジメントコース」がある。こうした事情から、スポーツ関連科目に注目して学部の選択を行っている入学予定者が少なくない。こうした入学予定者は、スポーツ関連科目が経営学部の基幹科目であると誤認して入学する恐れがあり、核となる経営学の周辺科目に関する知識が不十分なまま入学する場合がある。このことに関して、大塚ほか(2019)は、医学部医学科のAO入試の入学予定者を対象に、大学での専門(医学)教育に円滑に移行できるよう、入学前教育で医学教育カリキュラムの概要説明や医学英語の要約課題、地域医療に関するディスカッションなどを実施していることを報告している。また、アンケート結果から、これらのプログラムの中でも、医学教育カリキュラムの概要説明があったことで、入学後の学習への不安が解消し、前向きな姿勢で臨めたという意見が多かったことを報告している。大塚ほか(2019)の報告を踏まえると、第2部で経営学部の講義やゼミの概要を説明することで、今回対象となる入学予定者の学習への不安の解消や学習意欲の維持に、少なからず貢献できるものと予想される。

これらの目的を踏まえ、第2部のプログラムとして、入学後に受講する可能性がある講義の一部を抜粋して術語の解説をするとともに、ゼミナール活動の紹介を行った。第2部の到達目標は、(1)学習と学修の違いを理解すること、(2)どの程度大学の講義についていけるかを自覚すること、(3)ゼミナール活動における能動的学習の内容を理解することの3つであった。これらの到達目標に準じて、第2部を3つのセクションからなるプログラムとして構成した。具体的には、大学

での学びにどのような特徴があるかを説明するセクション A、模擬講義を行うセクション B、ゼミナールの紹介を行うセクション C の 3 セクションとした。第 1 部と同様、いずれのセクションにおいても、Microsoft PowerPoint for Microsoft 365 を使って作成したスライド (図 3 参照) を、オンラインミーティング上で参加者と画面を共有しながら、プレゼンテーションを行う要領で行った。

セクション A では、大学での学びを通じて、「知識を正しく理解し、再生できるようになる」という側面と、「再生した知識をもとに自分の考えに説得力を持たせることや是非、正誤を論じられるようになる」という 2 つの側面がある点を受講者が理解できるように説明した。なお、このセクションでは、2 つの側面の違いを鮮明化させるために、前者を「学習」、後者を「学修」と略式に定義し、イラストを使いながら両者の役割を説明した。

セクション B、C に関して、講義科目は「広告論」、ゼミナールは「現代広告研究」を選んだ。これらは、学生が入学後に受講可能な経営学部設置科目のうち、経営学の周辺に位置づけられるマーケティング系分野に属する科目である。

セクション B では、主題を広告訴求方法に設定した。資格対策講座を事例に取り上げ、広告を視聴させながら、訴求方法の違いを説明した。具体的には、教材が分かりやすいなどといった論理的説得方法が「理性訴求」に該当すること、資格を取らないと就職時に困るといった説得方法が「恐怖訴求」に該当すること、有名人の体験と試験合格の実績などを論拠とする説得方法が「第三者保証」に該当することを説明した。

セクション C で扱う「現代広告研究」からは、広告を企画する際にアイデアを拡げるために用いる、マンダラートの利用法を紹介した。資格対策講座の広告企画を事例とし、セクション B と関連付けながら、広告表現を立案する際の手がかりを増やしていくプロセスを紹介した。またゼミナールの履修生が制作した広告作品や企画書を公開し、マンダラートなどを能動的に活用し



図 3 第 2 部で使用したスライドの例

た結果として、いかなる完成物が期待されるかを説明した。

3. 学生の反応

3.1 アンケートの実施

入学前体験講座が終了した後、受講者の理解度の把握と感想（意見）の聴取を目的として、アンケート調査を実施した。調査票は Microsoft Forms を使って作成し、受講者に回答リンクを送信する形で回答を募った。なお、アンケートへの回答の信頼性を高める観点から、アンケート冒頭に受験番号の入力欄を設けたが、アンケートへの回答は任意であり、回答の有無や回答内容によるインセンティブはないことを受講者に周知した上で実施した。調査票は、(1)体験講座の第1部の理解度を測る質問、(2)第2部の理解度を測る質問、(3)自由記述で構成した。アンケートの質問項目は表2に示す通りであり、Q2～Q4が(1)体験講座の第1部の理解度を測る質問に、

表2 アンケートの質問項目

No.	質問項目	回答の選択肢, 回答の形式
Q1	受験番号をアルファベットから記入してください。	番号記入
Q2	篠原先生による講座を受講して、「高校と大学の違い」は理解できましたか？	1. 大変よく理解できた 2. 理解できた 3. あまり理解できなかった 4. 全く理解できなかった
Q3	「高校と大学の違い」について、主に3つの観点から紹介がありましたが、自分自身が今後の大学生活で特に意識していきたいのはどれですか？当てはまるものを選んでください（複数回答可）	1. 何のために行くか？ 2. 何を学ぶか？ 3. どう過ごすか？
Q4	篠原先生による講座を受講して、今の時点でのあなたの大学生活の目標や取り組んでみたいことを書いてみてください。	自由記述
Q5	田部先生による講座を受講して、「学習」と「学修」の違いは理解できましたか？	1. 大変よく理解できた 2. 理解できた 3. あまりよく理解できなかった 4. 全く理解できなかった
Q6	「広告論」の内容は理解できましたか？	1. 大変よく理解できた 2. 理解できた 3. あまりよく理解できなかった 4. 全く理解できなかった
Q7	「ゼミナール」の内容は理解できましたか？	1. 大変よく理解できた 2. 理解できた 3. あまりよく理解できなかった 4. 全く理解できなかった
Q8	入学前体験講座を受講した感想を自由に記述してください。	自由記述

Q5～Q7が(2)第2部の理解度を測る質問に、Q8が(3)自由記述にそれぞれ該当する。

3.2 アンケートの分析

得られた回答を集計し、受験番号の入力ミスなどがあった回答を無効回答とした。最終的に、回答データに欠損のない240名を分析対象とした。入学前体験講座の対象者数に対する有効回答率は、60.0%であった。得られた各項目の回答結果については、回答状況の単純集計を行った。また、Q4とQ8の自由記述については、どのような言葉が頻出するかを検討するために、KH Coder ver. 3.0による共起ネットワーク分析を行った。なお、本稿では描画する共起関係を絞り込むために、語の共起関係の強さを確かめる指標の一つであるJaccard係数を用いた。Jaccard係数は、2つの語のいずれかまたは両方が登場するテキストのうち、両方が登場するテキストの割合を示す指標であり、語の組合せの積集合を和集合で除して算出する(下記の数式を参照)。

$$Jaccard(A, B) = \frac{A \cap B}{A \cup B} = \frac{(\text{積集合})}{(\text{和集合})}$$

集合Aは語xを含むテキストの集合を、集合Bは語yを含むテキストの集合を指し、いずれも空集合 ϕ の場合、 $Jaccard(A, B)=1$ とする。数式から分かる通り、特定の2つの語が同時に使われる確率が高いほどJaccard係数は大きくなる(e.g., 2つの集合の要素のうち、共通要素が占める割合が大きい)。一般的にJaccard係数の値が0.1程度であれば2つの語に関連があり、0.2以上であれば強い関連があるといわれる。本稿では、Jaccard係数が1.5以上となる関係を描画することとした。これは、0.1を基準に描画すると、示される関係が複雑となり解釈しにくく、0.2を基準とすると、単純でかえって議論が難しいためである。

3.3 結果および考察

3.3.1 第1部に関する質問について

図4はQ2の「高校と大学の違い」に関する回答結果を示したものである。図4より、第1部における「高校と大学の違い」については、理解できた(「大変よく理解できた」と「理解できた」の合計)と回答した受講生は97.1%であった。このことに関して、田上(2019)は、入学予定者が入学前教育に参加・受講した際のアンケートで、「高校と大学の学びの違いについて知ることができた」という肯定的な回答が9割を超えていることを報告している。今回の入学前体験講座においても、田上(2019)の報告と同様に肯定的な回答が9割を超えていたことから、今回実施した入学前教育のプログラムが受講生の高校と大学の違いへの理解に少なからず貢献したものと推察される。

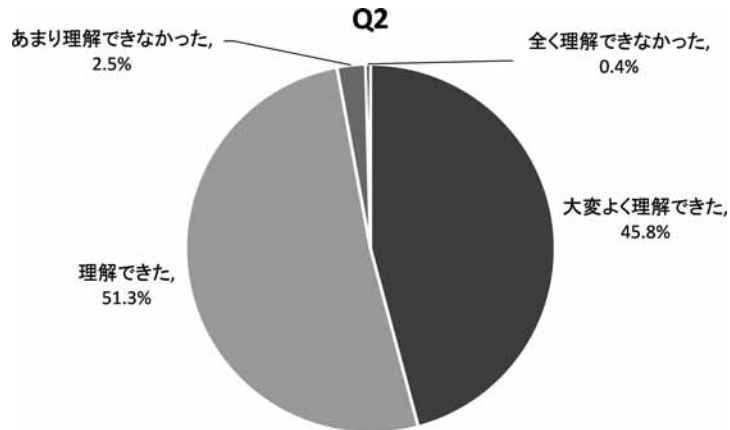


図4 「高校と大学の違い」に関する回答結果

図5はQ3の「今後の大学生活で特に意識していきたいこと」に関する回答結果を示したものである。Q3の回答結果をみると、「何を学ぶか？」と回答した受講生が63.8%と最も多く、次いで「どう過ごすか？」が61.7%、「何のために行くのか？」が41.3%であった。Q2の結果も踏まえると、受講生の高校と大学の違いへの理解は、大学で学ぶ内容やその学び方、また、それらを含めた大学での学生生活に紐づくものであると推察される。一方で、「何のために行くのか？」については約4割と、他の選択肢と比べて唯一半数を下回った。このことから、今後の入学前教育では、大学進学目的や大学卒業後の社会人としてのあり方をより意識できるようなプログラムが必要になるものと考えられた。

Q4の「大学の目標」に関して、その回答記述に含まれる頻出語を表3に示した。頻出語の共

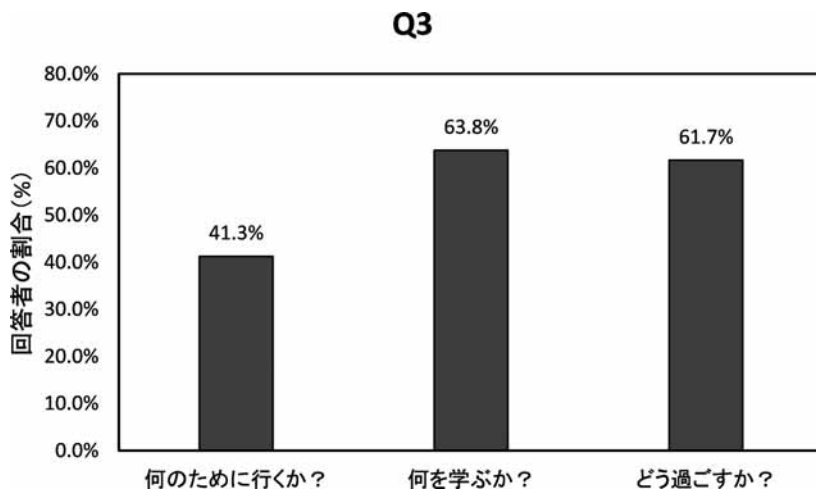


図5 「今後の大学生活で特に意識していきたいこと」に関する回答結果

起関係を確認する前処理により、段落が301、文が335確認された。語の延べ登場回数（総抽出語数）は5,652であり、語の種類（重なり語数）は738であった。ここから助詞や助動詞を除き、分析に用いた語は2,360（重なり語数580）であった。これらの語のうち、出現頻度が高い上位50語を表3に示している。なお、この結果は平仮名のみから成る一般名詞、形容詞、動詞（自立）、副詞、否定助動詞（「ない」「まい」「ぬ」「ん」）、形容詞（非自立：「がたい」「つらい」「にくい」）、および品詞に整理できないその他の語を除外した上での結果である。そして、表3の50語の中から、出現頻度が5以上ある抽出語について、共起ネットワークを描画したものを図6に示す。図をみると、10個のまとまりが抽出されていることがわかる。例えば、左の大きなまとまりは中心となる語が「大学」「自分」「思う」であり、質問への回答に際して記述する必然性が高い語句が集まっていると考えられた。また、左下の「教員」「免許」や、右上の「資格」「取得」などは、大学生活での目標という文脈で自ずと共起性が高い言葉であるといえる。これらの10のまとまりのうち、3つのまとまりに注目して考察する。なお、以降の自由記述回答は原文マ

表3 「大学の目標」への回答記述に含まれる頻出語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
思う	71	講義	12
自分	68	今	12
大学	65	知識	12
学ぶ	55	部活	12
資格	53	時間	11
生活	45	人	11
将来	41	両立	11
取得	39	力	11
勉強	37	興味	10
考える	30	授業	10
目標	29	送る	10
取り組む	26	入れる	10
活動	25	必要	10
取る	21	夢	10
スポーツ	18	明確	10
サークル	17	目指す	10
高校	17	陸上	10
積極	16	参加	9
頑張る	15	受ける	9
たくさん	13	充実	9
経営	13	入る	9
見つける	13	部	9
挑戦	13	理解	9
簿記	13	決まる	8
学習	12	様々	8

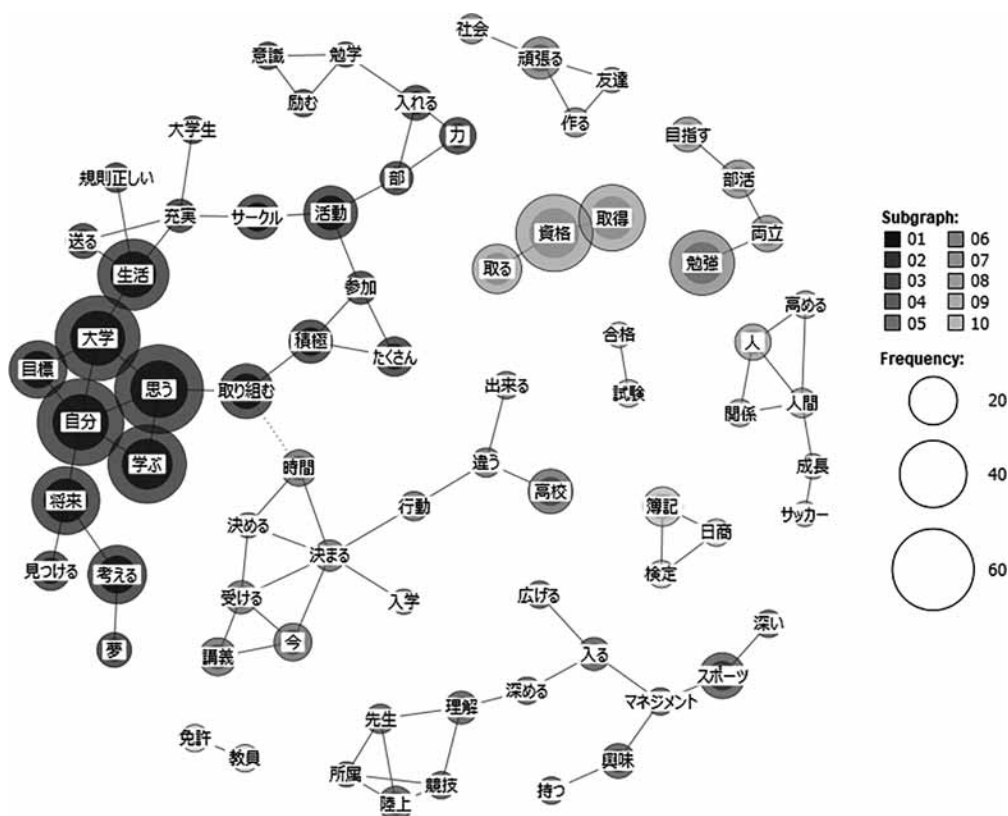


図6 「大学生生活の目標」への回答記述における語の共起性

マとする。

まず、中央の時間管理に関するまとまりについて、受講生からの自由記述回答をみると、「今までは決まった授業を決まった時間に受けていたが、大学では自分で決めるので、自分のためになる授業をしっかりと受けてたい。」「今までのように与えられた決まった生活スケジュールではないから、自分で考えて責任ある行動をしたいです。」「高校生まで決まった日程、時間割、などに準じてやってきたが、大学では自分で決めて自分のやる事をよりピックアップして取り組むことが出来るので、時間をより有効的に使おうと思っています。」などが代表的な回答であった。第1部では生活時間の管理が大学生活を送る上で強く求められる旨を説明したが、大学は高校に比べて自分で決める裁量権が大きく、自分でスケジュールをうまく設計することが重要であると受講生が認識していることが読み取れた。

続いて、右下のスポーツマネジメントに関するまとまりについて、受講生からの自由記述回答をみると、「健康スポーツマネジメントコースに入り、健康とスポーツについて理解を深めて、学んでいきたいと思いました。」「健康スポーツマネジメントコースに入り、健康とスポーツのこ

とについて深く学んでいきたいと思いました。」「教育について深く勉強をしていこうと考え(て)いるのでそこにスポーツを絡めて体育の先生を目指していこうと思います。部活は陸上競技部に所属して自己ベストをたくさん更新できるように練習に取り組みたいと思います(括弧内は筆者らが加筆)。」などが代表的な回答であった。前述の通り、経営学部の入学予定者にはスポーツ推薦入試を受験して合格した者が一定数みられており、その多くが高校時代に運動部に所属している。さらに、第1部では「どう過ごすか?」について、時間管理の重要性とともに、クラブやサークル活動の多様性にも触れた。これらのことが背景となって、特にスポーツ関連の知識を身につけることを目標とする声があったものと推察された。

そして、右の人間関係の構築に関するまとまりについて、受講生からの自由記述回答をみると、「なるべく多くの人と関わって幅広い人間関係を築いていきたいです。」「新たな友人を作ることや自分の人間としての質を高めたい。」「大学生活では資格を取るための勉強はもちろん、人間関係なども築き自分を人間として成長させることが目標です。」などが代表的な回答であった。今回の入学前体験講座は、コロナ禍ということもあり、オンライン形式での実施となった。しかし、第1部で説明したように、大学では授業で自身の学びを深めるだけでなく、クラブやサークル活動といった学生生活も過ごし方の一つとして重要であることを説明した。大学には全国から学生が集まることから、入学後に多様な学友と人間関係を構築することを目標とする旨のまとまりが検出されたものと推察された。

上記の3つのまとまり以外にも、資格や教員免許取得などのまとまりがみられていたが、今回の入学前体験講座では、資格や教員免許の取得に関することは取り挙げなかったことから、入学前体験講座を受講することで意識された言葉とは考えにくい。一方で、前述したように、今回の入学前体験講座の内容と符合する時間管理に関する記述が寄せられた点を踏まえると、今回の入学前体験講座における第1部の内容は、参加者の一定数から共感を得られたと考えられる。ただ、経営学に関連する語以上に、スポーツマネジメントというキーワードが前景化していることは、注目すべき点といえるであろう。高校の学びのなかに準備科目を見出しにくい経営学関連科目よりも、高校までの学び(保健体育や運動系の部活動)から内容を推測しやすいスポーツ関連科目の方が、学びたい目標として掲げやすい可能性がある。受講生が、経営学部への入学予定者であることをより意識できるようなプログラムが必要になるものと考えられた。また、新しい環境で人間関係を築きたいという、学びの副次的な側面に注目した目標もみられた。今回はコロナ禍ということもあり、オンライン形式で実施したことから、双方向型のプログラムを準備することができなかった。今後は、田上(2019)のように入学前体験講座の中で受講生同士が交流できるようなプログラムの導入も検討する必要があるといえるであろう。いずれにしても、Q4の大学での目標に関する自由記述の回答結果は、Q3において半数以上の学生から「何を学ぶか?」と

「どう過ごすか？」の2項目が大学生活で特に意識していきたい点として挙げられていたことにも合致する結果であったといえる。

3.3.2 第2部に関する質問について

図7～図9は、第2部に関する質問の回答結果を示したものである。Q5の「学習」と「学修」の違い、Q6の「広告論」の内容、Q7の「ゼミナール」の内容に関して、理解できた（「大変よく理解できた」と「理解できた」の合計）と回答した受講生は、いずれも85%以上（Q5：90.8%、Q6：85.5%、Q7：85.4%）と高い割合であった。ただ、第1部で説明した「高校と大学の違い」について、97.1%が「大変よく理解できた」または「理解できた」と回答していたことを踏まえると、特に「広告論」と「ゼミナール」では、理解できたと回答する学生が10ポイント

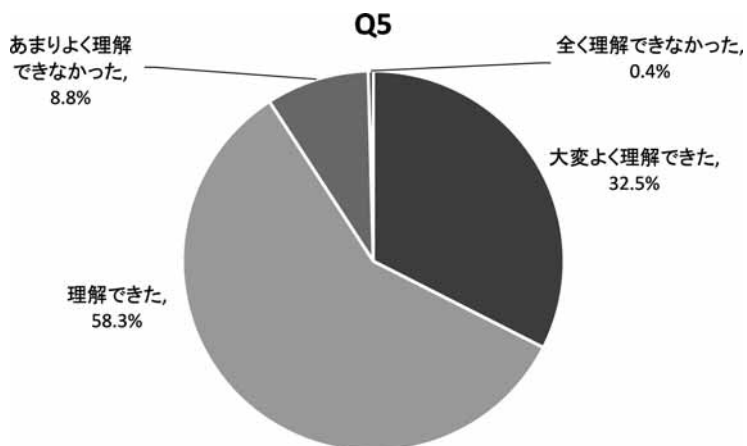


図7 「学習」と「学修」の違いに関する回答結果

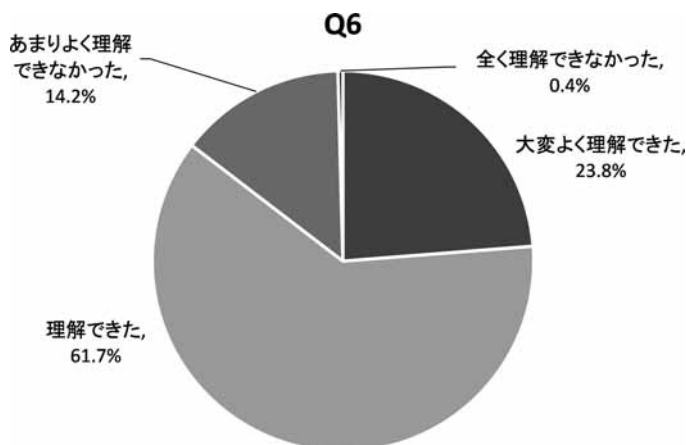


図8 「広告論」の内容に関する回答結果

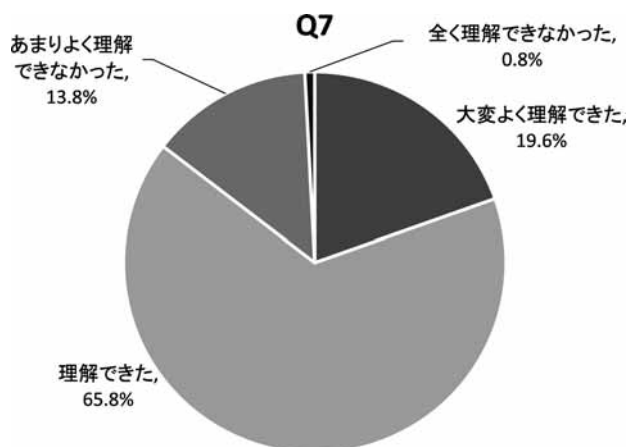


図9 「ゼミナール」の内容に関する回答結果

以上減少したことは、今後の検討課題といえるであろう。今回の入学前体験講座の第2部では、経営学の周辺に位置づけられるマーケティング系分野に属する科目として、「広告論」と「ゼミナール」を選定した。これらを選定した背景には、スポーツ推薦入試やスポーツ関連科目に注目して学部を選択を行っている入学予定者において、核となる経営学の周辺科目に関する知識が不十分なまま入学する者が少なくないという現状があった。このことに関して、Q4の大学の目標に関する自由記述の回答結果をみると、学びたい内容として「スポーツ」に関連するキーワードが頻出しており、経営学に関連する語が比較的少ないという結果であった。これらを踏まえると、今回の入学前体験講座で対象となった受講生においても、経営学の周辺科目に関する知識や理解が不十分な学生数は一定数みられたといえるであろう。今後の入学前教育を実施する際には、特にスポーツ推薦入試等で入学予定となっている者に対して、「経営学部の学生」として入学後に学習を円滑に進めることができるようなプログラムが必要であると考えられた。

3.3.3 入学前体験講座を受講した感想について

Q8の入学前体験講座を受講した感想に関して、その回答記述に含まれる頻出語を表4に示した。頻出語の共起関係を確認する前処理により段落が221、文が312確認された。語の延べ登場回数（総抽出語数）は6,423であり、語の種類（重なり語数）は714であった。ここから助詞や助動詞を除き、分析に用いた語は2,614（重なり語数530）であった。これらの語のうち出現頻度が高い上位50語（同率があるため57語）を表4に示している。なお、語の除外方針はQ4の分析と同様である。そして、表4の57語の中から、出現頻度が5以上ある抽出語について、共起ネットワークを描画したものを図10に示す。図をみると、11個のまとまりが抽出されていることがわかる。中央上部のまとまりは、中心となる語が「入学」「前」「講座」であり、質問への

表4 「自由記述」への回答記述に含まれる頻出語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
大学	174	今回	14
思う	82	受ける	14
高校	58	出来る	14
違い	45	田部	14
講座	45	学習	13
生活	44	今回	13
自分	42	入る	13
入学	35	話	13
分かる	32	感じる	12
学ぶ	30	興味	12
先生	30	ありがとう	11
授業	27	時間	11
楽しむ	26	知れる	11
少し	26	勉強	11
不安	23	目標	10
理解	23	イメージ	9
広告	22	頑張る	9
聞く	22	難しい	9
考える	20	ZOOM	8
知る	20	内容	8
講義	19	お話	7
違う	18	改めて	7
前	18	学修	7
体験	17	行く	7
楽しみ	16	使う	7
初めて	16	実際	7
受講	15	篠原	7
面白い	15	送る	7
		大学生	7

回答に際して記述する必然性が高い語句が集まっていると考えられる。これら11のまとまりのうち、5つのまとまりに注目して考察する。なお、以降の自由記述回答は原文ママとする。

まず、中央右下にある不安に関するまとまりについて、受講生からの自由記述回答をみると、「とてもわかりやすく教えて頂いたので、大学進学への不安や緊張が少し和らいで、より楽しみになりました」「初めの講座で不安であったがとても面白く、分かりやすかった。」などが代表的な回答であった。これらの回答結果を踏まえると、受講生は今回の入学前体験講座を通じて、大学に対する不安が解消されたものと推察された。その一方で、「高校と大学の違いが色々分かり、楽しい反面不安な気持ちにもなりました。まずは、今からできることを取り組んでいきたいと思いました。」のように、かえって不安にさせたという回答もみられた。Q6～Q7の回答結果も踏まえると、経営学の周辺科目に関する知識や理解が不十分である受講生にとっては、高校

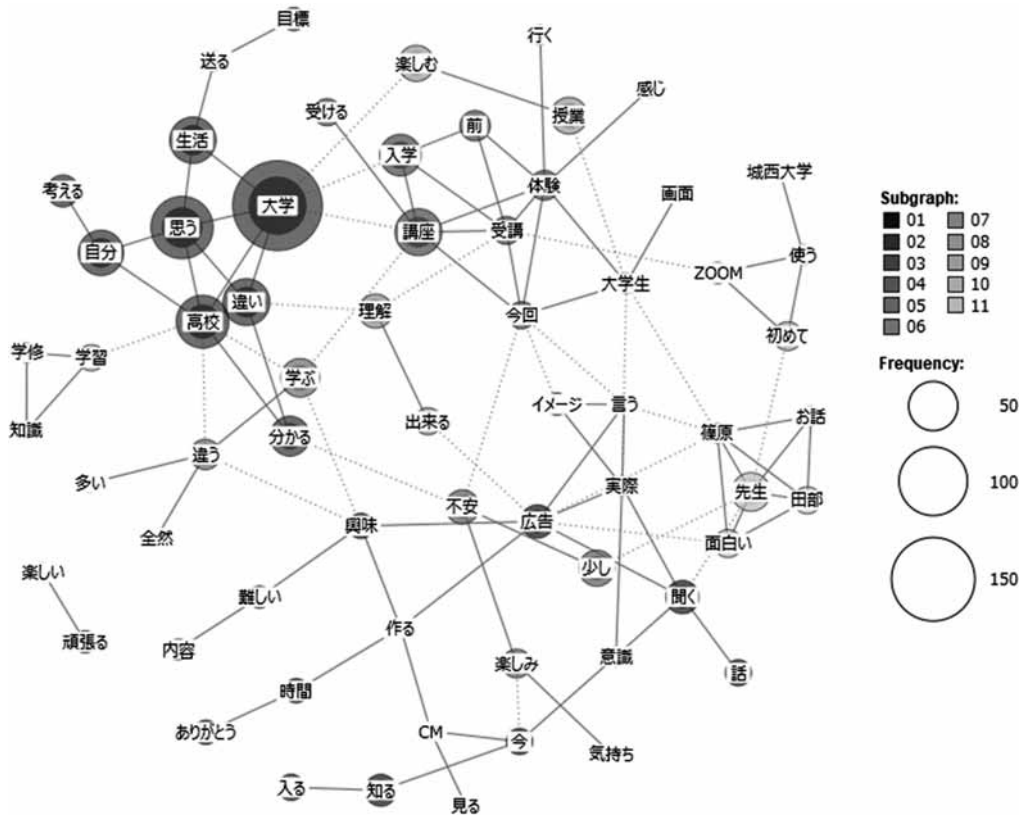


図 10 「自由記述」への回答記述における語の共起性

とは違う大学での学習やその内容に不安を覚えた可能性がある。前述したように、入学後に「経営学部の学生」として円滑に学習に取り組めるようなプログラムを入学前教育で実施することも検討する必要がある。

続いて、右の方にある受講形態に関するまとまりについて、受講生からの自由記述回答をみると、「初めて zoom を使ったこともあり不安でしたが、しっかりと受講できたので良かったです」や「初めての zoom でとまどったが、大学生活が楽しみになった」などが代表的な回答であった。コロナ禍の関係で、2020 年はほぼ全ての大学において、オンライン（ハイブリッド）型の授業が取り入れられるようになり、学生には Zoom などのオンラインミーティングアプリの使用が求められるようになった。今回の入学予定者も、入学後には一部の授業においてオンライン型の授業を受ける可能性があり、「zoom」の周辺の語から、今回の入学前体験講座は Zoom を円滑に使用できるかのテストとしても機能したことがわかる。なおコロナ禍以前にも、オンライン形式で入学前教育を実施してきた大学もみられる（森川ほか, 2019；大塚ほか, 2019；當山, 2019）。入学予定者の居住地が様々であることを考慮すると、オンライン形式で入学前教育を実

施することは、オンラインミーティングアプリへの習熟と併せて、入学前教育に参加しやすくなるという可能性も考えられる。今後は社会情勢も注視しながら、入学前教育の実施形態について検討する必要があるだろう。

また、受講形態に関するまとまりの下には、担当教員に関する感想のまとまりがみられた。担当教員2名の名前と「面白い」の共起性が高く、受講生からの自由記述回答をみると、「篠原先生、田部先生、どちらの講座もとても興味深いものでした。」「田部先生の講義では動画を使って分かりやすく入学してから受ける授業が楽しみにになりました。」「先生方が意外と面白かったです。」などが代表的な回答であった。このことから、今回の入学前体験講座によって、一定数の入学予定者が前向きになったと推察できる。

さらに、左上の第1部の目的に関する記述のまとまりについてみると、第1部で提示した目的の達成と関連が深い語のまとまりがみられた。受講生からの自由記述回答をみると、「そもそも大学とはどんな場所なのか、高校との違いを用いて教えて下さったり、実際に広告論の講義などを聞いて大学に入ってから自分のイメージを膨らませることが出来、不安も少し取り除けた気がします。」「体験講座を受けて、私は高校と大学の違いについて学びました。大学では教授の面白い講義があるので楽しみです。」などが代表的な回答であった。これらの回答は、Q2の「高校と大学の違い」に関する回答結果とも一致しており、自由記述においても、一定数の受講者が高校と大学の違いを理解したという肯定的な回答をしたものと推察された。

一方、右下の第2部の目的に関連したまとまりについて、受講生からの自由記述回答をみると、「田部先生の広告論は面白く興味を持ってました」や「広告論について興味が湧いてきたので入学後積極的に学ぼうと思う」という回答がある一方で、「まだ難しい点多々あったので、今後それらを理解できるよう努力していきたいと思う」や「高校の授業とは全く違う専門的な事がいくつかあり難しい部分もあったが、これからこういう風に学んでいくのかと興味がわき、これからの大学生活が楽しみになった」という回答もみられていた。このことから、受講生は高校にない科目である広告論に興味をわく一方で、内容が難しいと感じた受講生も一定数いたものと推察される。大学で実際に学ぶ内容と合わせて、受講生の経営学の周辺科目に関する知識や理解を助ける導入的な内容についても、入学前教育のプログラムに含めることを検討する必要があるといえよう。

以上のことを踏まえると、自由記述の共起ネットワーク分析によって、入学前体験講座で実施した第1部と第2部のプログラムの目的に関連した回答がみられたことから、受講者によって理解の程度に差はあれ、入学前体験講座の狙いに沿った内容を実施側は準備できていたといえよう。また、入学後の授業でも頻回で登場するZoomを使用したことや入学前体験講座を通じて学部

の教員を知れることは、入学後の受講形態のイメージや大学への興味を亢進させる効果が少な

らずあるものと推察される。ただ、入学前体験講座の受講によって、大学での学習への不安が解消した受講者もいれば、思っていた以上に難しく不安を感じた受講者も見受けられたことがわかった。このことは、今後本学で入学前教育を実施していくうえで、検討すべき課題が何かを示すものであったといえよう。

4. 今後の課題

今回の入学前体験講座の実施およびアンケート結果に基づいた受講生の反応により、多くの入学予定者が「高校と大学の違い」を理解していたことから、特に「大学教育への円滑な移行」には一定の効果があったものと推察される。一方で、第2部に関する質問や自由記述の回答傾向は両義的であった。講義やその内容への興味が亢進した者もいれば、難しいと感じ不安になった者も一定数みられていたことから、特に「学習意欲の維持」について検討すべき課題が見つかった。今後、城西大学経営学部への入学予定者に対する入学前教育を充実させるためには、課題に応じたプログラムが必要となる。前節での受講生の反応およびその考察を踏まえ、下記に課題を整理することとする。

まず、大学に「何のために行くのか？」への理解が低い受講生が比較的多いことから、大学進学目的や大学卒業後の進路を意識できるようなプログラムが必要であると考えられた。また、大学の目標に関して、経営学に関連する語が少なかったことや、第2部の経営学に関する模擬講義への理解度が低かったことから、受講生自身が経営学部の学生、すなわち学士（経営学）を目指す者として入学予定であることをより意識できるようなプログラムが必要になるものと考えられた。加えて、今回の入学前体験講座の受講により、大学での学習に興味があるものの、内容が難しそうで不安だという声もみられたことから、経営学の周辺科目に関する知識や理解を助ける導入的な内容をプログラムに組み入れることも必要であろう。これらに関して、當山（2019）は、入学予定者が入学前教育を受講して、大学講義への興味および自分の将来への興味を持つことが、大学入学までの主体的な学習につながる可能性を示唆している。また、森川ほか（2019）は、早期合格者が学習意欲を喪失しないようeラーニングを入学前教育に導入し、その導入前後で退学者率が減少したことを報告している。今回の入学前体験講座では、受講生はオンライン上でリアルタイムに模擬講義を受ける形式であったため、受動的な学習となってしまった可能性がある。オンライン形式で実施することで、居住地に関わらず受講できる点などはメリットではあるが、必ずしもリアルタイムで実施する必要はないといえよう。例えば、オンデマンドで実施し、動画の視聴と合わせて関連する課題による学習を行わせることは、他大学で行われているeラーニング形式での実施に近いといえよう。今回の結果を踏まえると、従来までのような

英語や数学などのeラーニングよりも、経営学に関するeラーニング教材や課題を準備して実施することが効果的となる可能性が考えられる。

また、上記の課題とは別に、受講生からは新しい環境で人間関係を築きたいという声もみられたことから、受講生同士が交流できるようなプログラムの導入も検討する必要があるといえよう。このことに関して、先述の當山（2019）は、入学前教育でeラーニングを実施する際、進捗について受講生間で交流できるだけでなく、学生チューターからコメントが届くシステムを導入していることを報告している。その結果、学生チューターからのコメントが多いほど、入学前教育でのスクーリング講義をもう一度受けたいと考え、来年度の入学予定者にも薦めたいと考えていることも合わせて報告している。田上（2019）も、学生スタッフを加えた教職学協働の体制で入学前教育を運営・実践しており、学生からのサポートが役に立ったことや先輩学生と話をすることができたことに関して、いずれも9割を超える肯定的な回答が得られたことを報告している。これらのことを踏まえると、今回の入学前体験講座のように教員のみが主導となるのではなく、在学生の登壇や交流できる場を設けることも、広義の意味で「学習意欲の維持」につながるものと考えられる。入学予定者は全国から集まるため、中には親元を離れて学生生活を送る者もいることが予想される。そのような入学予定者にとって、在學生との交流や入学前につながる友人を作る機会があれば、具体的に大学での学習や生活をイメージすることも可能となるであろう。大学での学習や生活への不安の解消がなされれば、学習意欲を喪失せずに、安心して入学後も学習に取り組むことにつながる可能性が考えられる。

これらの課題の他にも、プレースメントテストの実施（菅原，2020）や入学前教育受講生の追跡調査（田上，2019）、初年次教育およびリメディアル教育との連携（鶴飼，2019）なども、入学前教育を検討する上で重要な視点であると考えられる。本稿冒頭で述べたように、今後も12月以前に入学手続きを行う受験生の割合は増えることが予想される。本学への入学予定者に対しては、特に「学習意欲の維持」を図ることが重要ではあるものの、入学前教育の実施内容や実施方法によっては、大学や学部としての教育方針や学生募集の方針を検討することにも活用できる可能性がある。これらを実践していくには、大学本部の入試課や学部の教務担当教員、初年次教育担当教員などとの連携が必要不可欠である。入学前教育の実施内容と合わせて、運営体制についても、合わせて検討していく必要がある。

謝辞

今回の入学前体験講座の実施にあたり、経営学部教授山口理恵子先生ならびに経営学部准教授柴沼真先生に多くの貴重な示唆を賜りました。また、英文要旨の作成にあたり、経営学部助教ミハイル・マリノフ先生にご助言を賜りました。ここに深く感謝申し上げます。

参考文献

- 伊藤茂樹（1999）大学生は「生徒」なのか ― 大衆教育社会における高等教育の対象 ―. 駒澤大学教育学研究論集, 15 : 85-111.
- 森川修・山田貴光・小山勝樹・小倉健一・古塚秀夫（2019）早期合格者に対する入学前教育 ― 鳥取大学での15年間の実践 ―. 大学入試研究ジャーナル, 29 : 239-244.
- 文部科学省（2018）平成33年度大学入学者選抜実施要項の見直しに係る予告の改正について（通知）. 文部科学省 2018年10月22日. https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfil/2018/11/06/1397731_03.pdf（2021年11月27日閲覧）
- 文部科学省（2020）令和3年度大学入学者選抜実施要項について（通知）. 文部科学省 2020年6月19日. https://www.mext.go.jp/content/20200619-mxt_daigakuc02-000010813_4.pdf（2021年11月27日閲覧）
- 文部科学省（2021）令和4年度大学入学者選抜実施要項について（通知）. 文部科学省 2021年6月4日. https://www.mext.go.jp/content/20210617-mxt_daigakuc02-000010813_1.pdf（2021年11月27日閲覧）
- 文部科学省（2021）令和2年度国公立大学入学者選抜実施状況. 文部科学省 2021年3月31日. https://www.mext.go.jp/content/20210330-mxt_daigakuc02-000013863_1.pdf（2021年11月27日閲覧）
- 大塚智子・関安孝・喜村仁詞・武内世生（2019）インターネットを介した入学前教育「高知大学入学前moodle」 ― 学習意欲維持への試み ―. 大学入試研究ジャーナル, 29 : 29-35.
- 菅原良（2020）入学前教育におけるプレースメントテストの信頼性とAO・推薦入試合格者の学力推移 ― 2015～2018年度入学者のテストスコアの統計分析から ―. 明星 明星大学明星教育センター研究紀要, 10 : 45-52.
- 田上正範（2019）新入生の意欲を掻き立てる入学前教育プログラムの実践報告. 追手門学院大学 基盤教育論集, 6 : 75-85.
- 當山明華（2019）大学入試センター試験を課さない入試区分合格者への入学前教育の効果と課題. 長崎大学 大学教育イノベーションセンター紀要, 10 : 1-5.
- 鵜飼昌男（2019）高大接続から見た大学の初年次教育のあり方について ― 入試が選抜機能を十分果たさない現状に対する提案 ―. 関西大学高等教育研究, 10 : 37-46.

A Case Report of the Pre-admission Program for Freshmen in the Faculty of Management

Yasuo Shinohara, Keiya Tabe

Abstract

This paper reports on the pre-admission program for freshmen in the Faculty of Management. The program was conducted in February 2021 (Reiwa 3rd). The purpose of the program is twofold: a) to facilitate the transition into higher education; and b) to maintain the learning motivation. We conducted the program in two parts. In the first part, we explained the difference between high school and university focusing on “Reasons to study”, “What to learn”, “How to spend time” so that freshmen can easily transit into higher education. In the second part, we explained the characteristics of studying at universities. In addition, we gave an outline of the lectures and the seminars at Josai University so freshmen can maintain their learning motivation. At the end of the program, attendees answered a web survey. The results are as follows. Many freshmen understood the difference between high school and university. Therefore, it is presumed that the pre-admission program had a positive effect on facilitating the transition into higher education. On the other hand, based on answers regarding the questions in the second part and the free-form answers, there were a certain number of freshmen who found it difficult to keep up with lectures and seminars on business administration. From these results, our suggestion is as follows: In order to enhance the pre-admission education at the Faculty of Management, Josai University, it is important to implement introductory programs in business administration.

Keywords: pre-admission education, difference between high school and university, smooth transition into higher education, maintaining motivation for learning